



朝鮮總督府中央試驗所報告

第十九回 第一號

窯業原料調査

慶尙北道迎日郡東海面に於ける酸性白土

昭和十四年五月

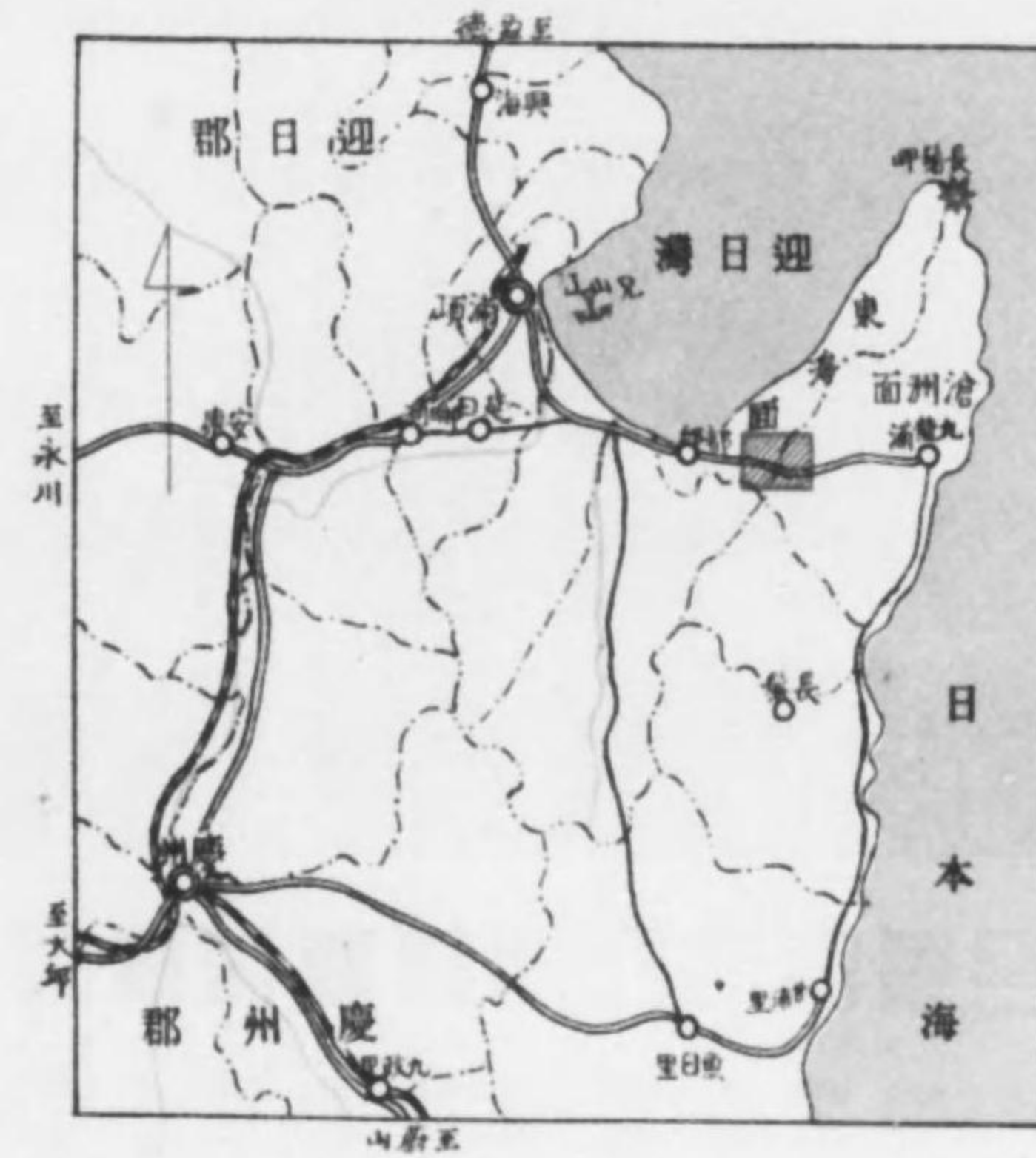


始



14.21  
362

酸性白土產地位置及交通圖  
— 之 分 萬 十 五



I種  
W



\*1200600364098\*

酸性白土產地附近地質圖

慶尙北道迎日郡東海面上石里

縮尺五萬分之一



石炭露頭	礫床露頭	長鬚礫岩	凝同灰岩上	納拿里粗面岩	安新山亭岩里	下部含炭層	下部玄武岩	上部含炭層	岩質凝灰岩山	兩延日玄武岩	洪積層	沖積層
(部 下) 系 三 第									系 四 第			

凡例

慶尙北道迎日郡<sup>東海</sup><sub>滄洲</sub>面に於ける酸性白土調査報告

昭和十二年十二月調査

技手 山 崎 亨  
技手 山 田 義 雄  
囑託 木 脇 祐 之

目 次

I 緒 言	VI 酸性白土の應用試験
II 位置及交通	a 色素吸着試験
III 沿革	b 應用脱色試験
IV 地形並地貌	{ i 發動機油脱色試験
V 地質鑛床	{ o アスファルト燈油脱色試験
VI 酸性白土の一般性狀	[附] 各種油脱色試験
a 色 調	VII 採掘粉碎狀況
b 化學成分	VIII 鑛 量
c 酸性反應	IX 結 言

I 緒 言

酸性白土は外觀木蠟に似て、普通の粘土或は陶土に類似するも、其の性狀を異にし、指示薬又色素に對し、酸性反應を呈し、又吸着力及脱色力強く、石油、動植物油脂の精製脱色脱水に、又魚油より硬化油製造等に必要缺ぐべからざる原料にして、殊に朝鮮に於ては既に石炭乾餾油の製造あり輸入原油精製事業あり、日本海沿岸には夥しき魚油の産出あり、又糠油製造の計畫ありと聞くあり加之是等精製に使用せらるる白土は悉く内地より移入しつある現状にある際、我が鮮内にも平安南道中和郡、江原道蔚珍郡並慶尙北道迎日郡に之れが賦存するを知り、内最も有望視せらるる本地方の鑛床を實地調査し採取資料に就き試験せる結果、品質良好、量亦豊富なるを認めれば茲に大要を報告せんとす、斯界に何等かの貢獻する所あらば幸甚なり。

II 位置及交通

本産地は慶尙北道迎日郡東海面と滄洲面との境界近くに賦存し、然も東海岸に於ける良港迎日灣に臨み、浦項邑の東 4 Km 内外にして、浦項邑九龍浦(漁港)間の約中間に位し自動車を通ず。浦

項邑は迎日郡廳の所在地なるのみならず、又東海岸南部の良港にして、京釜線大邱驛より東 71.3<sup>km</sup> あり。又途中慶州驛（浦項より 36.4<sup>km</sup>）より分岐し東海線 115.2<sup>km</sup> にして釜山に到る鐵道を通じ、附近貨物の集散地なれば金融、通信、警察、税關、教育等の諸機關完備せり、又自動車は四方に通じ交通運搬至便の地なり。

### III 沿 革

本山は浦項在住西村友雄氏東海面にて石炭山經營中昭和八年七月中旬現場主任木村氏の子息拾ひ來りし土塊石鱗様の脱脂力あるを知り、之れを小林久平博士に鑑定を乞ひしに良質の酸性白土なる旨回答を得、又昭和十一年九月滿鐵に依頼試験の結果良好なりしかば一部露頭部の土地買収をなし現今に到れるものにして未だ採行せられず。石洞に於けるものは昭和十三年春より浦項在住松村常市氏亦有望なるを知り試掘を開始し林谷洞（造土）海岸に粉砕工場を設立試製粉中なり。

### IV 地形並地貌

日本海岸線に平行せる罪足嶺山脈は東北東に走り、鳥項山 (247.6<sup>m</sup>)、金鷲山 (231.1<sup>m</sup>)、孔開山 (214.6<sup>m</sup>) の峻峰をなし、日本海及迎日灣への分水嶺を形成し遂に長鬚岬となりて迎日灣の東を扼し、日本海に没す。而して本産地は鳥項山の北麓なる迎日灣に注ぐ溪水と日本海に注ぐ溪流との分水嶺をなす小峠を中心として第三紀層中にありて地形一般に低丘の箇所に埋藏せらる。

### V 地質鑛床

本産地附近の地質は朝鮮總督府地質調査所長立岩巖技師の發表に係はる地質圖第貳輯に依れば第三系下部に位する長鬚統中の納台里粗面岩及砂岩頁岩礫岩を夾有する凝灰岩と之れを被覆する凝日玄武岩及兩輝石安山岩流よりなる。而して鑛床は玄武岩の噴出により凝灰岩が變質し酸性白土を形成せられしもの如く、常に鑛床は最も玄武岩並安山岩の熔岩噴出せる四近に賦存するを見る、次ぎに鑛床露頭の狀況を詳述せんとす。

露頭は浦項邑及九龍浦港間を通ずる自動車道路の約中間にあり。滄洲面と東海面との境界をなす小峠を中心とし 2 Km 以内に存し三箇所に露はる。(一)(二)は東海面石洞に(三)は滄洲面上政里大朴にあり。(一)は東海面石洞部落の東約 1 Km 道路に接して存し一般走向傾斜 N 30~35°E 30~40°NW 層厚 3~5m 露頭延長約 100 m に及ぶ色は種々あり淡紅色、クリーム色、淡褐灰色、帶青灰白色、灰白色等を呈せり。淡紅色のもの最も微粒良質にして順次粗粒悪質となり灰白色になり。

凝灰質となる、埋藏數量は色彩の順列に逆比例する事何れの露頭にても同様なり。

(二)は(一)より東に九龍浦街道を進む事約 1 Km にして道路急に南折し昇坂とならんとする所に一小橋あり夫れより北に入り西側崖及其の延長先なる小溪流に露出す。一般走向傾斜 N 70~85°E 30~50°N 層厚 5~6m 露頭延長 200m± にして淡紅色乃至灰白色なる事(一)同様なり。(三)は滄洲面上政里大朴部落の北方約 350~400m に露出し直接玄武岩流に被覆せらる、走向 N 80°E より N 80°W の間に變し北に 40~50° 傾斜し層厚 10~15m± 延長約 500~600m に及ぶ。質東部にて良好なれども西に向ふに従ひ硅酸質となる傾向あり。而して色彩は一般に淡黄灰白色及灰白色を呈せるものなり。

其他面境峠の南麓に本調査後良質の露頭を發見せりといふ。

### VI 酸性白土の一般性狀

上叙せる白土の成分と一般性狀とを知るべく各露頭の代表的試料に就て施行せる試験結果を示せば次の如し。

#### 【a】色 調

各露頭より採取せる標品の色調をロビボンD比色計により示せば

R=赤色 E=黄色 B=青色

標品番號	産 地	色 調	備 考
No. 1	慶尙北道迎日郡東海面石洞露頭(一)	R0.10+E0.14	松村常市氏採取場 走向 N30E 傾斜=40°N. 層厚 3~5m
No. 2	同 上	B0.24+E0.16	同 上 (帶青色部)
No. 3	同 上	R0.7+E0.48	西村友雄氏所有
No. 4	同 上	R0.8+E0.48	同 上
No. 5	露 頭(二)	R0.02+E0.36	(秋田某氏のもの西村氏買収せり) 面境峠西より北溪谷に入り、西北溪流に露はる 走向=EW 傾斜=30°~50° 層厚=10m No. 5 の西約 150mに No. 6 あり
No. 6	同 上	R0.02+E0.36	
No. 7	同 上	R0.50+E0.46	上記溪流に入る西側
No. 8	滄洲面東海面埠峠	B0.14+E0.28	密質なる、灰白色凝灰岩
No. 9	滄洲面上政里大朴	B0.06+E0.40+R0.20	砂質凝灰岩 走向 N40W 傾斜 305
No. 10	同 上	B0.03+E0.26+R0.05	稍々酸性白土化せる凝灰岩 走向 N35E 傾斜 60NW 層厚 5m
No. 11	同 上 露頭(三)	B0.02+E0.24	西村氏所有 走向 N80W 傾斜 40N 層厚 10~15m No. 11 の上層位にあり玄武岩流に覆はる
No. 12	同 上 露頭(三)	R0.28+E0.30	走向 N40W 傾斜 50N No. 12 の西約 100m の所
No. 13	同 上(約中央部)	R0.17+E0.32	走向 N40W 傾斜 50N
No. 14	同 上 (東 端)	R0.10+E0.28	上下とも表土に覆はるる厚 5m 露出せり 走向 N65E 傾斜 50N
No. 15	同 上 (西 端)	R0.10+E0.36	角礫狀玄武岩の直下にあり 幅 15~20m に及ぶ
No. 16	新 湍 縣 糸 魚 川	R1.00+E1.25	市販賣品に就て本所試験せり
No. 17	同 縣 小 戸	R0.66+E0.70	同 上 (以下同様)

【b】 化 學 成 分

而して是等色調を有するものより各鎮床の代表的標品に就て其の成分を知るべく化学分析を行ひし結果は次の如し。

試料番號	無水珪酸	礬土	酸化鐵	酸化チタン	石灰	苦土	加里	曹達	約減	熱量	計
No. 1(-)	67.96	17.24	1.43	0.19	2.32	1.45	0.53	1.93	7.69		100.74
No. 4(-)	68.92	17.20	2.52	0.20	0.60	2.40	0.29	0.50	7.72		100.35
No. 5(二)	69.30	14.38	1.72	0.14	2.36	1.01	3.41		7.51		99.83
No. 6(二)	72.60	14.26	2.14	0.20	1.52	2.51	0.36	0.45	6.64		100.68
No. 11(三)	70.48	14.61	1.32	0.15	2.06	1.23	0.72	1.81	8.22		100.60
No. 13(三)	71.56	16.25	1.14	0.15	1.14	1.37	1.92		7.10		100.63
No. 15(三)	69.96	14.65	1.14	0.15	2.54	0.77	4.01		7.03		100.25
糸魚川産	70.32	15.15	2.14	0.15	1.76	2.29	0.86		6.96		99.63
小戸産	71.70	14.27	3.23	0.20	1.64	2.46	0.57		6.47		100.54

【c】 酸 性 反 應

酸性白土の化学的性状の一として青色リトマス試験紙を赤變せしめ、又白土の水懸濁液中にフェノールフタレインの如き指示薬を滴下すれば大體に酸性を示す。(時にアルカリ性を呈する物あり) 又中性鹽の水溶液より酸を分離する特性あり。之等を總括して白土の酸性反應と稱す。今此の性状を列擧して内地産酸性白土と比較を試みんとす。

【4】 白土水懸濁液の性状

乾燥試料 (120°C にて二時間) 1 gr をコニカルフラスコに秤取して蒸留水 100 gr を加へ暫時振盪後フェノールフタレインを滴下して液相無色 (酸性) ならば百分一規定苛性曹達液にて滴定し其所需中和量を知る、猶此の場合液相が桃紅色に着色する (即ちアルカリ性の) 場合は百分一規定鹽酸を以て滴定中和す、其の結果は次表の如し。

試料番號	酸性又アルカリ性	N/100 KOH 所要量	N/100 HCL 所要量	試料番號	酸性又アルカリ性	N/100 KOH 所要量	N/100 HCL 所要量
No. 1	アルカリ性	—	0.1	No. 10	酸性	1.4	—
No. 2	同上	—	1.3	No. 11	同上	1.4	—
No. 3	酸性	2.4	—	No. 12	同上	9.6	—
No. 5	アルカリ性	—	0.8	No. 13	同上	3.5	—
No. 6	酸性	2.8	—	No. 14	同上	1.8	—
No. 7	同上	3.9	—	No. 15	同上	1.3	—
No. 8	アルカリ性	—	2.2	新潟縣糸魚川	同上	17.6	—
No. 9	酸性	1.3	—	同 小戸	同上	5.0	—

【d】 中性鹽溶液に依る白土の酸性

中性鹽溶液 (例へば鹽化加里、鹽化バリウム等) に酸性白土を加へ振盪し静置の後完全に濾過すれば其溶液が酸性を帯ぶる事に依り、其酸性度を鑒識する法にして、今乾燥試料各 1 gr 採り一規定鹽化加里及鹽化「バリウム」溶液 20 cc を加へ温度攝氏 20°~25° にて一時間振盪後静置濾過して之を百分一規定苛性曹達にて滴定中和し其所需量を見るに、

試料番號	鹽化加里液に依る「アルカリ」所要量	鹽化「バリウム」液に依る「アルカリ」所要量	試料番號	鹽化加里液に依る「アルカリ」所要量	鹽化「バリウム」液に依る「アルカリ」所要量
No. 1	1.2	1.9	No. 10	2.0	1.2
No. 2	1.2	1.2	No. 11	1.8	1.8
No. 3	3.6	2.4	No. 12	10.0	8.0
No. 5	2.3	1.8	No. 13	2.8	2.6
No. 6	2.8	2.2	No. 14	2.4	1.8
No. 7	4.8	3.4	No. 15	2.5	2.8
No. 8	1.0	1.4	新潟縣糸魚川	13.8	12.6
No. 9	1.4	1.8	同 (小戸)	4.0	2.0

以上の如く白土の酸性反應に於ては内地産酸性白土の代表品たる糸魚川、小戸産白土と比較して特異なる相違を認めず。

VII 酸性白土の應用試驗

酸性白土の色素吸着能に就ては活性炭と同様能く色素を吸着し且油脂を脱色する力を有すれば色素吸着力強きものは脱色力に富むと言ひ得べし。然れども其の脱色能は各々の色素及び脱色精製せんとする物質に依り異れば、之れを二分して色素吸着試驗と應用脱色試驗とに分ち其の性能を分明せんとす。

【a】 色素吸着試驗

乾燥試料各 1 gr に對し鹽基性、酸性及直接染料の各 0.5% 色素水溶液 30 cc を採り、一分間 60 回轉の振盪機にて 5 分間振盪したる後 30 分静置濾過後液をジュボスク氏比色計にて吸着後の色素の濃度を知りて吸着率を見出す。即ち

$$kd - k'd' = \frac{k}{k'} - \frac{d'}{d} \therefore K' = \frac{kd}{d'}$$

となり、即ち K' を求む。(但 k=標準液の濃度、d=標準液の層の厚、k'=吸着後の試料濃度、d'=同試料の液層の厚)

而して其の結果は次表の如し。

試料番號	直接木綿染料 Congo Red		直接木綿染料 Japanese Brown		酸性染料 Solar Cyanine 5R		酸性染料 Picric Acid	
	吸着率 (%)	順位	吸着率 (%)	順位	吸着率 (%)	順位	吸着率 (%)	順位
No. 1	58.68	7	39.76	8	18.03	7	全然 吸着せず	—
No. 2	55.16	9	87.95	3	27.01	2	同上	—
No. 3	74.36	3	79.34	5	21.87	5	同上	—
No. 5	57.27	8	32.04	10	15.25	10	同上	—
No. 6	97.81	1	90.00	1	20.00	6	同上	—
No. 7	95.31	2	90.00	2	24.24	3	同上	—
No. 8	69.61	4	28.06	12	9.09	14	同上	—
No. 9	39.76	13	32.03	11	9.09	15	同上	—
No. 10	27.54	15	21.26	13	13.79	13	同上	—
No. 11	45.65	11	殆んど 吸着せず	15	23.08	4	同上	—
No. 12	68.55	5	同上	16	14.53	11	同上	—
No. 13	53.33	10	13.04	14	15.25	8	同上	—
No. 14	39.76	12	61.54	7	14.53	12	同上	—
No. 15	吸着せず	16	32.04	9	15.25	9	同上	—
新潟縣糸魚川	39.39	14	75.96	6	殆んど 吸着せず	16	同上	—
新潟縣小戸	67.43	6	86.54	4	43.77	1	同上	—

但、各染料は日本染料製造株式会社製標準品を使用せり。

以上試験の結果に依れば鮮産品は内地産白土より優良なる色素吸着能を有する事を認め得たり。即ち試料番號 No. 1. No. 2. No. 3. No. 6. No. 7 の如きは鹽基性、酸性及直接染料の如き化學構造の如何を問はず常に内地産白土より優秀なる結果を示せり。

#### 【b】 應用脱色試験

酸性白土を實際使用するに當りては其精製脱色せんとする品（例令礦物又動植物油等）に就て各々の脱色試験を行ひて其の性能を知るを要するも其の繁雜を避け本所にては豫備試験とし一般的なる發動機油及アスファルト燈油溶液を用ひ便宜上標準被脱色油となし一般油脂脱色試験成績の標準とせり。

#### 【1】 發動機油脱色試験（豫備試験）

朝鮮石油株式会社元山工場製發動機油（商標名一茶發油一油層一時の時 Lovibond's Tintometer R 5.4) を色濃度 100 と定め被脱色油 20cc 乾燥白土 0.5 gr を加へ 20°C にて前記染料吸着試験同様操作して一時間振盪脱色静置し濾過せる物に就て色濃度をジュボスタ氏比色計にて測定せる結果は次表の如し。

試料番號	脱色率	脱色後の油色濃度	脱色後の色度 Lovibond's 比色計 (油層 1 吋)	脱色率順位
供試原油	—	100	R5.4+E18.0	—
No. 1	41.18	58.82	R4.6+E18.0	8
No. 2	56.52	43.48	R3.5+E18.0	1
No. 3	42.53	57.47	R4.3+E18.0	7
No. 5	41.18	58.82	R4.3+E18.0	8
No. 6	56.52	43.48	R3.5+E18.0	1
No. 7	53.05	46.95	R3.6+E18.0	2
No. 8	28.57	71.43	R5.2+E18.0	12
No. 9	33.78	66.22	R4.7+E18.0	10
No. 10	42.86	57.14	R4.6+E18.0	6
No. 11	50.00	50.00	R3.9+E18.0	3
No. 12	45.36	54.64	R4.2+E18.0	4
No. 13	41.18	58.82	R4.3+E18.0	8
No. 14	39.76	60.24	R4.5+E18.0	9
No. 15	33.34	66.66	R4.9+E18.0	11
新潟縣糸魚川	41.18	58.82	R4.3+E18.0	8
新潟縣小戸	47.76	55.24	R3.7+E18.0	5

但し供試油は比重  $d_{15}^{15} = 0.8434$  引火點 72.5°C のものなり。

以上の結果より其脱色力の優劣を窺ふに試料番號 No. 2. No. 6. No. 7. No. 11. No. 12 の如きは内地最優良品たる蒲原白土（小戸産）より良好なる吸着脱色能を有し、更に糸魚川産白土と比較するに至りては供試料 14 種中 11 種は之れと同等或は之れ以上の脱色能を具備するものにして、決して其の性能に於て内地品に劣る所なきを認め得たり。今此の豫備試験結果に依り代表試料を選出し吸着試験を行ふ事次の如し。

#### 【ロ】 アスファルト燈油溶液の脱色試験

アスファルト燈油溶液を標準被脱色液として使用するは、該試験結果が工業的に礦物油及動植物油の脱色精製に用ひたると同様の効果を示すを以てなり。之れを便宜上標準被脱色油として使用し一般油類に對する概括的効力の規準とせる物にして、其の結果が總ての油脂脱色の規準ならざるは言を俟たざるも現今市場に於ては此法を以て酸性白土脱色力試験の標準法として採用されつつあり即ち被脱色油（アスファルト燈油 3% 溶液）20cc に乾燥白土（105~120°C 3時間）を夫々 0.1 gr 0.2gr 0.3gr 0.4gr 0.5gr の各重量を添加して、之れを毎分 60 回轉の振盪機にて一時間振盪し充分

之れが脱色効果を發揮し平衡濃度に達せしめし後、静置し上澄液を濾別し、之れをジューボスク氏比色計にて前述 (kd=k'd') なる比色計原理に依り脱色後の色濃度を算出測定す。但し被脱色油の色濃度は常に 100 とし算出の基準とす。

以上總ての試験に於ける試料の粉末度は Tyler 標準篩 170 mesh を通過せる物を使用せり。

アスファルト燈油溶液の脱色試験表

試料 番號	脱色率(白土が脱色せし油濃度)					脱色後の油濃度				
	0.1Gr	0.2Gr	0.3Gr	0.4Gr	0.5Gr	0.1Gr	0.2Gr	0.3Gr	0.4Gr	0.5Gr
No. 1	33.33	54.55	70.75	77.14	81.53	66.67	45.45	29.25	22.86	18.47
No. 2	45.30	61.17	75.74	84.40	87.17	55.70	38.83	24.26	15.60	12.83
No. 3	31.46	62.08	68.11	76.78	81.68	68.54	37.92	31.89	23.22	18.32
No. 4	39.31	70.86	74.08	80.54	88.26	60.69	29.14	25.91	19.46	11.74
No. 5	38.55	73.06	74.12	77.36	80.30	61.45	26.94	25.88	22.64	19.70
No. 6	40.91	74.92	77.33	84.44	90.19	59.09	25.08	22.67	15.56	9.81
No. 7	33.92	70.13	78.62	83.79	88.23	66.08	29.87	21.38	16.21	11.77
No. 10	33.89	48.40	68.07	77.23	82.50	66.12	51.60	31.93	22.77	17.50
No. 11	41.66	59.36	75.13	80.40	85.25	58.34	40.64	21.87	19.60	14.75
No. 12	32.59	58.10	65.00	70.37	75.02	67.41	41.90	35.00	29.63	24.98
No. 13	41.84	49.35	67.85	72.10	76.71	58.16	50.65	32.15	27.90	23.29
新潟糸魚川	38.75	53.45	62.73	69.00	76.10	61.25	46.55	37.27	31.00	23.90
新潟小戸	44.15	67.57	76.61	81.10	85.90	55.85	32.43	23.39	18.90	14.10

となり今試料白土の各添加量に於ける脱色率順位を一覧表としせば次の如し。

各添加量に於ける脱色率順位表

試料番號 添加量	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	新潟 糸魚川	新潟 小戸
0.1Gr	11	1	13	6	8	5	9	10	4	12	3	7	2
0.2Gr	10	7	6	3	2	1	4	13	8	9	12	11	5
0.3Gr	8	4	9	7	6	2	1	10	5	12	11	13	3
0.4Gr	9	2	10	5	7	1	3	8	6	12	11	13	4
0.5Gr	10	4	8	2	10	1	3	7	6	13	11	12	5

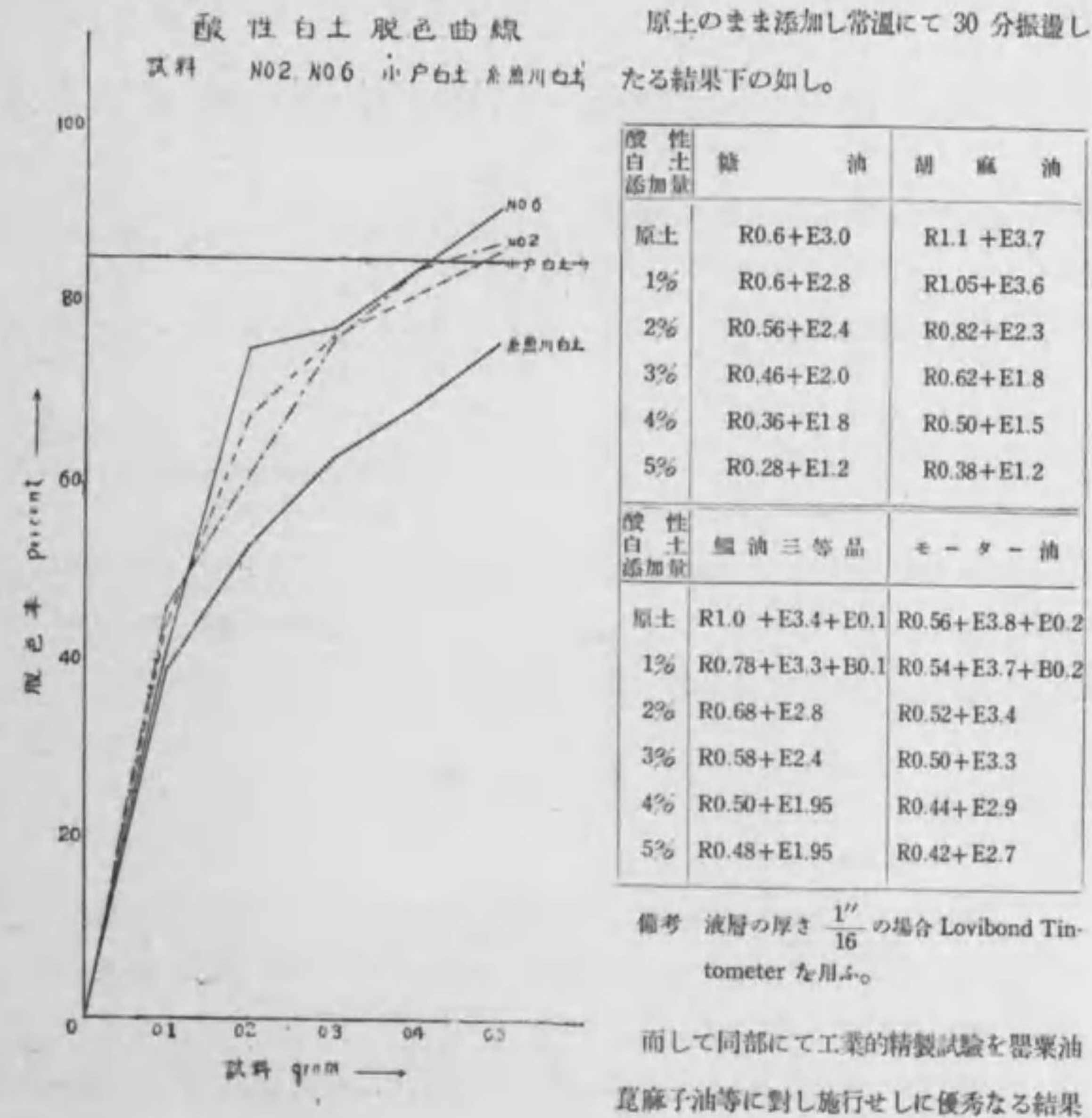
以上の如く本邦代表的酸性白土たる小戸産に比して No. 4. No. 6. No. 7 等は勝るとも劣らざる好成绩にて新潟糸魚川産の如きは鮮産品に比し遙かに不成績なるは豫備試験結果と同様なり。

而して其の代表的なるものに就き脱色力曲線を示し被脱色油の 85% を脱色するに要する酸性白

土の所要量を圖より求むるに先づ白土の脱色線の 85% の點を求め、之れに對應する點へ垂直線を下して以て概算すれば可なり。即ち小戸白土に於ては之れ脱色に 0.48 Gr を必要とす、然るに試料 No. 6 にては約 0.41 Gr の試料 No. 2 に於ては約 0.42 Gr の試料 No. 7 にては 0.43 Gr 猶試料 No. 4 は約 0.46 Gr を要する事となり、夫々の試料白土より見れば 14%(0.07Gr), 12%(0.06Gr), 10%(0.05Gr), 4%(0.02Gr) 等少量を使用するも猶ほ小戸白土と同一脱色効果を示す事となる。更に之れより劣等なる糸魚川産白土に至りては 0.6 Gr 以上 (鮮産品の 1.2 倍以上) を添加せざれば所期の目的を達し得ざる事によりても鮮産白土が如何に優良なるを窺知し得らる。

[附]

次に本所化學工業部安技師の試験せし脱色成績を掲げて参考に供せんとす。(試料 No. 4 に相當するものなり)





を得たり。即ち原土を豫め 130°C にて 2 時間乾燥し 120°—150°C の下に脂油脱色に使用成績頗る良好なりしといふ。

### VIII 採掘及粉碎状況

浦項住松村常市氏東海面石谷（露頭一）の西側に於て採掘を行ふも未だ試掘中にして手掘るに過ぎず。鑛石は之れを天日乾燥を採掘現場及林谷洞造士の海岸に在る粉碎工場にて行ひ乾燥せる鑛石を重油による 40 馬力堅型船用機関を原動力とし約 1 60 封度搗鑛機 24 本を以て粉碎しバケツトエレベーターにて上昇せしめ六角篩 2 個により 100mesh を通過せしめ製品とする設備を有するも、調査當時は未だ充分なる操業を見るに到らず試験粉碎中なりき。

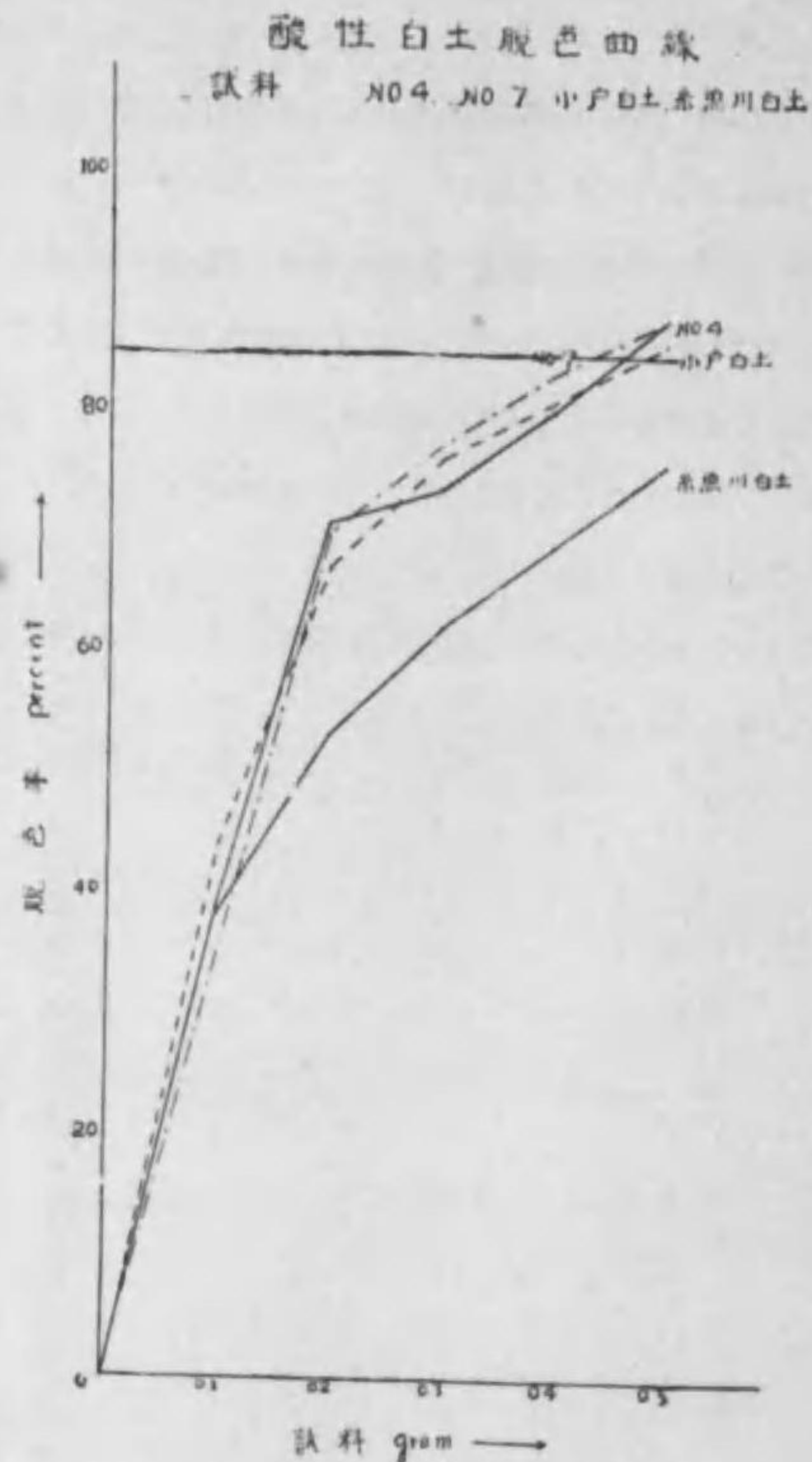
### IX 鑛 量

今回調査せし三ヶ所の露頭の上に就て概算するに數十萬噸の埋蔵あるものと豫想せらるるを以て其後の發見に係はるものを加算する時は、恐らく百萬噸を以て算せらるべく、又立岩地質調査所長に従へば滄洲面城洞里及峯山面率浦里にも露頭ありとの事なれば本地方には其他にも夥しく賦存せらるるを推察せらる。

### X 結 言

以上試験の結果を綜合するに

- (1) 朝鮮産酸性白土を分析して其成分を知るに何等内地産品に比して、成分上異なる所なし。
- (2) 朝鮮産酸性白土の水懸濁液の性状及中性鹽水溶液處理に於ける白土の酸性度を試験せしに内地産品に比し特別なる相違點を認めず。
- (3) 各種色素の吸着試験を試みしに大體に於て内地産品に比し稍々良好なる吸着能あるを認め得



たり。

(4) アスファルト燈油溶液を標準被脱色油として使用し、其脱色能を驗するに内地産白土より優秀なる脱色能を發揮するを認めたり。

(5) 白土の酸性度と其の脱色率との間には何等の關係を見出し得ず、但し白土のアスファルト燈油溶液の脱色率に對して色素水溶液の吸着率との間には本試料相互間に關する限り稍々同一傾向の吸着關係を有し上下する事を認めたり。

依是觀之鮮内産の酸性白土は内地産の夫れに比して何等の遜色なく、寧ろ優秀なる成績を擧げるを窺知するに足れり。加之埋蔵量亦豊富なるのみならず原土採掘並に製品搬出共に便利なる地に賦存するを以て一日も早く之れが地下資源の開發を切望して止まざる所なり。

終りに臨み本報告に際し援助されし立岩地質調査所長並に本所安技師に深厚なる感謝の意を表せんとす。

No. I  
東海面石洞(一)露頭  
南より北を望む



No. II  
東海面石洞(二)露頭  
南より北を望む



No. III  
滄洲面上「政里(三)露頭」  
西より東を望む



No. IV  
(一) 露頭試掘附近乾燥場  
東より西を望む



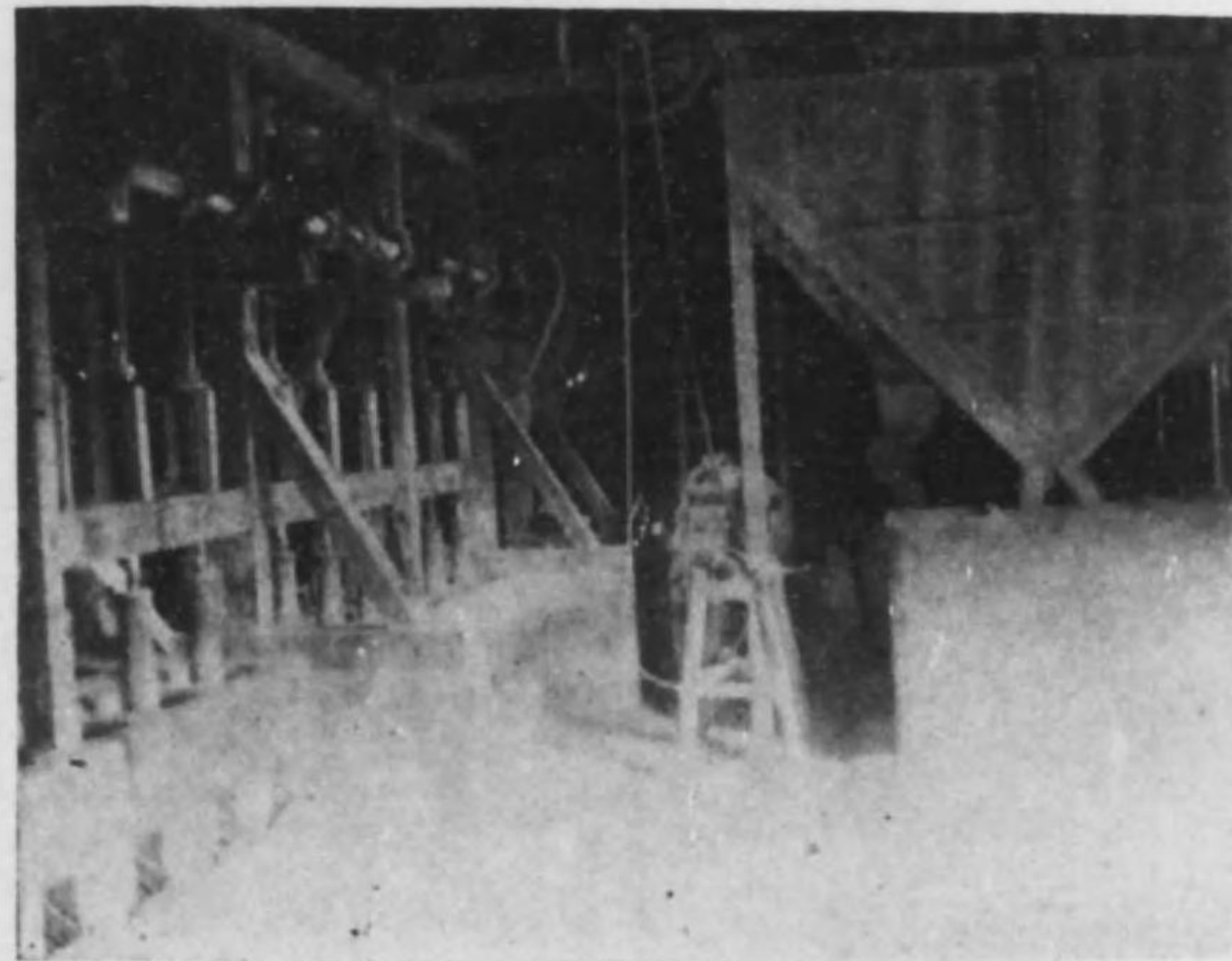
No. V

東海面林谷洞造土粉碎工場と乾燥場  
(松村氏經營)



No. VI

同上粉碎工場内部



昭和十四年七月二十三日印刷

昭和十四年七月二十五日發行

朝鮮總督府中央試驗所

京城府東崇町

印刷人 近 澤 茂

京城府長谷川町七十四番地

印刷所 近 澤 印 刷 部

京城府長谷川町七十四番地

14.21-362



\*1200600364098\*

終

362